瑞光山禅林寺　〒510-1225　三重郡菰野町下村 191 番地℡・Fax059 - 393 - 2040　メール zenrinji@cty-net.ne.jp

でんでら通信 第二百三十一号 令和七年四月

花まつり

四月八日はお釈迦様のお生まれになった日です。今年も門前に花御堂を祀り甘茶供養をいたしますので、みなさまどうぞご参詣ください。

坐禅会

四月三十日（水）十時に坐禅会を開催します。みなさんのご参加をお待ちしております。

庭詰（にわづめ）

お彼岸も過ぎ、ようやく春らしい日々がまいりました。春といえば、卒業、入学、入社など新しい門出を迎えられた方もおられることでしょう。

当禅林寺でも新命（しんめい、後継者のこと）である長男がこの春、大学を卒業し、新しい世界へと足を踏み入れました。

三月二十六日早朝、名古屋にあります徳源僧堂という修行道場へ掛搭（かとう、入門のこと）しました。頭を剃り、脚絆、草鞋を着け、笠をかぶり、江戸時代と同じ雲水（うんすい、修行僧）姿です。

禅宗では入門するにあたり本人の意志がどれだけ固いかを見極める試験があります。これは試験なのですが、筆記試験や体力試験ではありません。その人物がどれだけ願心が固いか、今後、どれだけ修行に耐えられるかを見極める昔ながらの試験です。

まず初日に庭詰（にわづめ）というものがあります。早朝、道場の大玄関の縁先に腰掛け、願書、誓約書、履歴書、戸籍謄本、を前に並べ、頭を床につけて、

「たのみましょうー」

と大声で何度も叫びます。小さい声では、いつまで経っても出てきてくれません。

「どーれー」と、ようやく出てきた取次の修行僧が前に座わったら、

「三重県三重郡〇〇、禅林寺住職〇〇徒弟　〇〇、当道場への掛搭をお願い致したく参りました。どうぞお取次ぎの程、よろしくお願いいたします。」

と決まった口上を言うと、取次の僧が、

「しばらくお待ちください」

と言って奥へ行ってしまいます。

しばらくすると、先ほどの僧がやってきて、

「当道場は只今、満衆（満員のこと）につき、毎日の食事にも困っている状態です。この近辺には他にも修行道場はありますので、どうかお引き取りください」と無下に断られる。

（道場が少人数で困っていても、決まりとしてこのような返答することになっています）

「はい、そうですか。わかりました」といって引き返しては、試験はパスできません。

私はどうしてもここに入門したいのです、という意志を見せなければなりません。そこで玄関の縁に腰掛けて頭を下げた状態で許しが出るまで同じ態勢を続けます。一時間、二時間と頭を下げていると、腰も痛くなり、ボーっとしてきます。

道場によっては、このころに挿絵のような僧が出てきて、

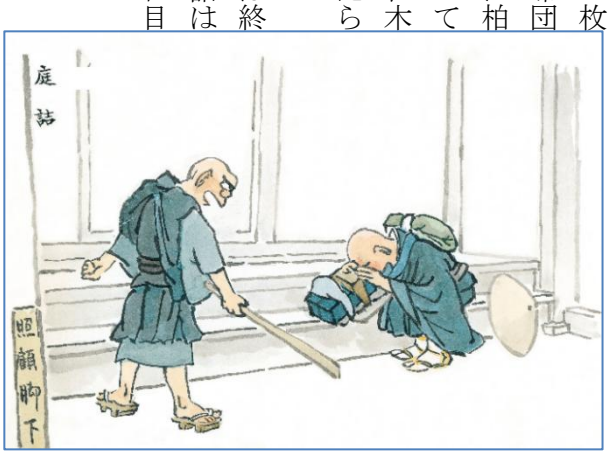
「まだいたのかー、さっさと出ていけー」

と、帯をつかんで門の外へ引っ張り出されるところもあります。出されたらちょっと足や体を伸ばし、休憩してから、また戻っていって縁先に頭を下げ続けます。

庭詰途中には、トイレには行けますし、お昼になれば、勝手口から土間に案内されて、ご飯と味噌汁だけは出してくれます。ただし食べると苦しいのと眠気が襲ってきて、見つかるとどやされます。

やがて昏鐘（こんしょう。夕方の鐘）がなったら、取次の僧が出てきて、

「投宿（とうしゅく、一晩の宿）を許しますからお上がりください」

と、一部屋へ案内され、その後、修行僧たちの末席で薬石（やくせき、夕食）の雑炊をビビりながらいただきます。やがて宿帳に記入し、一枚きりのかしわ布団（一枚の布団に柏餅のように入って眠る）が運ばれ木板の音が鳴ったら就寝します。

こうして初日は終えますが、庭詰はまた翌日の二日目も行います。